

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の
在り方等に関する有識者会議（第1回）における主な委員の意見等

【広義の才能と狭義の才能】

- 子供たちの個別最適な学びとウェルビーイングを前提にしつつ、「特定分野に特異な才能」を広く捉え、子供たちに才能教育を提供することについて自由な議論を行っていききたい。
- 狭い範囲の特異な才能を持った子供に限らず、より広く、個に応じた学びの一環として、様々な子供たちの興味・関心等のニーズに応じた学びの在り方を考えていくべき。
- 一部の人を特別に取り出し差別化を図るという議論のみを行うべきではない。まずは通常のクラスの中で多様な子供たちが学べるようにするための議論を行った上で、更に特別な才能がある子供への教育をどのように保障するかということの、二段構えで議論を進めていくことが重要。
- 義務教育においては、全ての子供たちが能力に応じた教育を受けることができるということを目指すべきというのが大前提であり、本会議においてもこの前提を発信しながら審議を進める必要がある。日本社会は特定の才能や立場がある人に厳しい目を向けやすいという世論形成の特性があるが、本来の目的を見失わず、社会的に賛同されるテーマを意識しながら議論を進める必要。
- 選ばれた人として対象をあまり絞ってしまうと、目立ちすぎてストレスがかかる。米国では対象が5～6%程度となっていることも参考に、対象となる児童生徒の選定は行うものの母数を広げて考える、広義と狭義の間のような仕組みを考えるべきではないか。

【才能の対象、見いだし方】

- 日本の教育は、オールラウンダーを育成する教育が主であったが、そこから脱却し、一つの分野に突出した子供について、才能を発揮できる場・機会をいかに作っていくかを議論していくことが必要。
- 複数の領域を通じて興味関心を持つ子供も、一つの領域を深める子供もいる中で、才能をニュートラルに捉えることが重要。
- 才能の識別に当たっては、特定の意図を持ったプログラムを学校外で提供し、識別の基準を示すことが考えられる。教師は、才能の見いだしまではできなくても、個々の子供が困っていること（つまずきや、退屈そうにしていること）については把握してほしい。
- 低年齢の子供に対して、ピアから離れていない段階から取り出しを行うことについては、慎重に考える必要がある。
- 「ギフテッド」という言葉は、極めて稀有な才能を意味していると誤解される場合や、2E（発達障害と才能を併せ持つ子供）という意味だと誤解される場合があり、論者により対象イメージが異なるため、本会議において使用すべきではない。

【児童生徒が抱える困難】

- 発達障害や不登校（不登校傾向を含む）の児童生徒が型にはまった学校教育では対応しきれないことは明らかであり、そういった児童生徒のための教育の場が必要。才能を伸ばすという側面だけではなく、メンタルヘルスという側面も重要。
- 社会に便益をもたらすような才能を生かす人材の育成という側面よりも、才能を持つがゆえに困っている児童生徒のニーズに対応するという側面から捉えるべきではないか。
- 不具合の状態に置かれている当事者がいるのではないかと思う。不具合の情報をすぐに共有し、修復することができるが良い。逆に、不具合を自分の内に秘めてしまう事態は避けなければならない。

【早修と拡充】

- 日本の文化には、早修よりも拡充の方が合っていると考える。
- 狭義の早修を進めていくことのデメリットを考える必要がある。日本社会には先輩後輩の意識が根強いことや、学校教育には社会性を育む包括的な学校教育の提供という役割がある点にも留意が必要。
- 早修については、民間の塾や早期プログラムなどの既存の実践を踏まえ、成果や課題を検証していくことが必要。
- 早修や拡充のほかに、学び直しや後回しといった概念も考え得る。

【学校の教育課程上の取扱い】

- SSH や、理数探究基礎・理数探究・総合的な探究の時間などが活用できるのではないか。
- 指導方法を変えたり、探究的な学習活動を行ったりすることにより、困っていた子供が救われることがある。このような教育方法の見直しも含め、教師の問題についても議論していくことが必要。
- 大学は、これまで以上にサマープログラムや MOOC などの教育プログラムを提供し、高校生が大学の単位を修得する機会を充実すべき。
- 既存の取組（SSH、SGH、WWL、大学飛び入学、早期卒業・修了、通級による指導等）の成果と課題を確認することが必要。
- 既存の取組について、メンタル面も含め、時系列で追跡していくことが必要。
- 1人1台端末も活用した個別最適な学びの在り方や、チーム学校の成果・課題について考えていくことが必要。

【外部機関等との連携】

- 学校教育だけで全て対応しようとするのではなく、地域・大学・民間なども含めてどのように対応していくかを考えていくべき。むしろ、学校の負担に鑑みると、地域・大学・民間に軸足を置き、その取組を学校にも接続していく仕組みの方が現実的ではないか。
- 子供のニーズ・才能は様々であり、さらに、認知的な特性や合理的配慮の必要性なども掛け合っている。それぞれの多様な子供と環境とのマッチングが重要。
- 日本の才能教育に当たる分野は、大都市圏の小学校受験・中学校受験や各種の習い事等により担われてきた。
- 拡充については、各々の子供たちが持つ多様な才能を発揮できる機会を増やすことが重要。様々な分野のコンテストを数多く設け、他の参加者の考え方にも触れられるような機会を設けることが考えられる。
- 民間が提供する学習機会（オルタナスクールなど）も含めて、教育として公的にオーソライズしていくことが考えられる。
- 公教育と民間などの関係機関を繋いでいく方法や、公的資金を関係機関に配分していく財政支援の在り方についても検討が必要。
- 子供たちの才能を伸ばしていく取組を行う際、どのような財源（リソース）で行うのかという問題についても検討すべき。地方財政のみに委ねられた場合、適切な支援ができない地域が生じることもある。
- 格差の問題への対応は、ジェンダーや経済的なものも含め、あえて多様な状態になるように選抜を行うことが重要。また、経済的な支援についても考える必要がある。